



ウッドバッジ実修所 第一教程（課題研究）

BS 課程

提出日：平成 26 年 9 月 20 日

ふりがな	なかがわ かずゆき	性別	男・女
氏名	中川 和之		
所属	神奈川県連盟（横浜南央地区） 横浜 第 9.6 団 B.S. 隊（役務） 隊長		

課題研究	指導を受けた人		指導・助言内容
	役務	氏名	
課題 1	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	最初の班長訓練であるグリーンバー訓練が、スカウトの都合で、実施できなかったのはやむを得ないが、実施するとしたらという前提の計画書を、リーダーハンドブックを参考に作成すること。
課題 2	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	具体的なプログラムプロセスを、リーダーハンドブックにある図を参考に、プログラムプロセスと、実施したことが分かるように、図示すると分かりやすい。
課題 3	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	2013年度の年間プログラムを見直し、改善点が具体的に分かるように書き込んで資料を用意すること。
課題 4	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	研修所、実修所は、指導者の任務中の支援であるイン-サービスサポートと位置づけられるようになっているが、隊指導者の課題解決へのイン-サービスサポートは団委員会が中心になる。
課題 5	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	計画書は、リーダーハンドブックにある形式を参考に、作成することを意識して下さい。
課題 6	横浜南央地区 コミッショナー	須藤 照夫	次の隊長に引き継ぐという課題を、プログラムプロセスを通じて、解決をする方法を考えて欲しい。

平成 26 年 9 月 21 日

認定トレーナー署名（LT・ALT）（氏名）

前田 幸 

第一教程（課題研究）

ウッドバッジ実修所BS課程第186期 第一教程（課題研究）



日本ボーイスカウト神奈川県連盟横浜南央地区

横浜第96団 ボーイ隊長 中川 和之

2014年9月

課題 1

班長会議を開催し、スカウトの憧れや興味を新たに集約し、①隊集会 ②班長訓練の各計画書を作成してください。

背景

昨年9月、2年余の単身赴任から戻ったばかりだったが、横浜96団のボーイ隊長を引き継いだ。ボーイ隊指導者歴は、西宮25団当時でカブ隊副長と重複で2年半（1999年9月-2002年4月）、横浜96団では副長5年（2008年9月-2012年8月、うち2年余は単身赴任で不在）での隊長だった。

その時点で団委員長となった元ビーバー隊長から、1、2年後には団委員長を引き受けるよう、強く依頼されており、隊長としての仕事は、活動を行いながら、次の隊長にバトンタッチするのが任務となった。単に、スカウトの成長を支援するだけでなく、次期隊長候補によく分かってもらいながらのプログラムプロセスをするのが、課題となった。

2004年にCS部門の実修所に行き、その効果を身をもって知っていたことから、この課題に向き合うに当たり、実修所に行くことを考えていたが、今回、日程が可能になったため、参加を決めた。

課題1は、一つの隊集会につなげることが求められているが、実修所に行くことを決めた時期に年間プログラムの作成時期でもあり、次期隊長候補とも相談しながら進めたことから、この計画作りを課題とした。

実施事項

年度初めに作成した13年度の年間プログラム（資料1-1）では、あいまいだったが、春のキャンプ後、年度後半のスケジュールを確定し（資料1-2）、7月5日のグリーンバー会議をきっかけに、年間プログラムの検討を進める計画（資料1-3）にしていた。隊長が出張になったため、班長への伝達指示書（資料1-4）をもとに、副長の指導でGB会議を進行を計画したが、次長も英検試験の前日で欠席となり、班長と指示書を元に電話相談をして、自宅で計画書を作成して、メールで内容を確認することとした。

7月19日の訓練キャンプ（計画書・資料1-5）で、GBと次期班長候補の3人で、10年間の次年度で実施したいプログラム（資料1-6）を具体的にピックアップした。この指導は、14年度からGB担当となるRSの若い副長補がアドバイザーで付いて、過去のプログラム内容を伝えながら、選択していった。検討の結果、やりたい活動、後輩にやらせたい活動として、次の隊集会候補が上げられた。

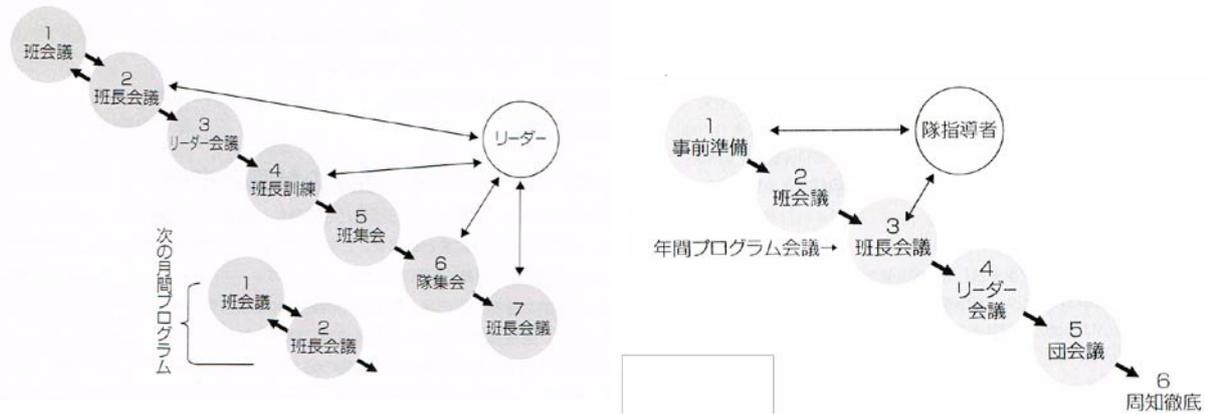
歓迎キャンプ、技能大会への訓練キャンプ、アイススケート、サイクリング、電車ハイク、50キロハイク、アーチェリー、海釣り、ユニセフ募金、班キャンプ、夏の村・富士山？

本来は、さらに班員がそろった段階で班集会とし、班員の意見も聞きながら、中学生の試験日程なども想定したカレンダーに割り付け、年間プログラムのたたき台とする予定だった（資料1-7）が、この日のキャンプには部活などで他の班員が参加できず、3人で、エクセルにはめ込んだ年間プログラム案（資料1-8）を作成した。

これにより、上進していくスカウトとしては、後輩にやらせたいプログラムが盛り込まれると共に、この検討過程で、現GBから次期班長との指名を受けたスカウトが、先輩たちがやってきたプログラムの中から興味があるプログラムを選ぶことが、この隊キャンプを通じて実現出来た。

課題 2

課題 1 - ①の隊集会を行うためのプログラムプロセスを図示し、実行のために必要な留意点を記述してください。（プログラムプロセスには、班集会、班長会議、班長訓練、班集会（班の活動）、隊集会が含まれていること）



通常、隊集会は、左図のような流れで行われるが、今回は隊集会（隊キャンプ）の中で、年プロ会議のプロセスを盛り込んだため、隊長ハンドブックのなかから、関係のある図で留意した点を記述する。

今回のキャンプでは、部活に入りたての中1が3人、同じ部活（バトミントン）でペアを組む中3の班長、次長というスカウトの実情がある。班員がなかなかそろう機会がない中で、集まりやすい夜の時間とし、多くのスカウトが参加できる場とした。行ったことは、右図の年プロ会議の中の「2班会議」、「3班長会議（GB会議）」に該当する。

まず、右図の「隊指導者←→1事前準備」、左図の「リーダー←→2班長会議」に該当するものが、7月5日に結果としては行われなかったGB会議である。班長とは、よく電話で打ち合わせをしており、5日のGB訓練の意図については、事前に説明をしていたことが、この←→に該当する。班長一人だけで、GB訓練とすることも考えたが、同学年の次長が受験に向けた英検のために欠席する中で、塾がある前の短い時間に会議をするより、自宅での計画書作りをしてもよいと提案し、班長が自分で中止を決めた。班長のモチベーションが、何よりの財産だと考える。

GB会議（班長会議）は、計画だけに終わったが、そこでの計画を元に班集会が実施された。これは、左図の「1班集会←→2班長会議」に該当する。年プロ作りでは該当しないが、班集会で上進訓練を実施したプロセスは、「3リーダー会議→班長訓練→班集会」に該当する。

その後の隊集会（隊キャンプ）には、当時のGBから、次期班長と指名されたスカウトが参加した。この結果、隊キャンプでは、上進訓練と一緒に活動したクマスカウトたちのことも念頭に置きながら、隊集会の中でのGB活動として、年間プログラムの案を作成することが出来た。

この時点での年プロ案は、右図の「4リーダー会議」で整理し、「5団会議」の場で団の年間スケジュールとも調整をした上で、完成させた。

課題 3

自隊の現在の年間プログラムを活動内容および進歩課程の観点から評価し、改善点を記述してください。

2013年度は、スカウトの数が5人となり、1個班と多くなかったため、個々人の進歩状況をみながら、随時、年プロで予定しているプログラム内容（資料3-1）に、必要な進歩を当てはめていった。年間計画を立てていたものの、実際にはGBの2人の部活や塾、試験などの予定を最優先し、随時組み直していった。結果として、GB2人の出席率は9割近かったが、班員は6-7割に留まった。（資料3-2）

年間目標としては、GBの2人を上進までに菊スカウトに、16NJに参加するために小6春で2級を取得していたスカウトを除く2人を、中学進学段階までには2級の取得ができることを目指した。

班員の進歩の管理は、班長が行っているが、班長からの申告を受けて隊長もエクセルデータに反映している。（資料3-3）

隊長がスカウトの進歩状況を確認しながら、進歩に必要なターゲットバッジの科目などをチェックし、リーダーミーティングやリーダー会議で、隊集会や班集会、GB訓練に当てはまりそうな進歩科目を想定。GB会議で、GBたちと相談しながら進歩科目の取り組みを進めた。

結果として、GBの二人は、春のキャンプ後に団面接を経て1級を取得し、そこから3カ月後に地区面接を経て菊章を取得できた。菊章の取得には、班長だからこそこなせる科目が実質的には不可欠だが、次長は前年度は3年目で班長を務めており、2人同時の菊章取得となった。（資料3-4）

初級だった班員2人は、春のキャンプの前後で科目をクリアし、中学入学前の春休み中に2級ハイクを実施してくれたことで、計画通り中学進学段階で2級を取得できた。2級スカウトだった班員の13年度内での1級取得は、かなわなかった。

2014年度（資料3-5）は、3人の上進スカウトを10月半ばの訓練キャンプで、隊長面接、団面接を経て初級とするプログラムを進行している。その中で、当初から2級も視野に入れた進歩につながるプログラムとしている。

初っ端の歓迎キャンプで行った初級項目になる基本訓練などを実施した後、直ちにその場で進歩手帳を出させて、班長にサインをもらうという場面を何度か設けた。新班長も、上進スカウトも、進歩は班長のチェックというやり方を、年度初めに繰り返したことで、双方共に進歩管理を意識するスタートが切れた。

3人中1スカウトには、班長、次長とともに、GBのいずれかが休んだ場合に次長役となる「3番スカウト」までをGB会議の対象とし、班長が管理している進歩状況を、GB会議で相互に確認しあいながら、進めていく計画である。特に、班長が自身でできない進歩点検が忘れられがちになるため、次長の務めとして、班長の進歩のチェックとリーダーへのサインの具申のアドバイスを、GB会議で確認した。

初級スカウトの誕生後、全体の進歩を計画的に行うため、次期隊長候補（進歩担当副長）に年間プログラムに進歩を割り当てる原案の作成を依頼している。

部活に入っているGBは、予定が当月初めにしか分からず、集会日や集会内容は弾力的に見直しが必要になるが、計画的に進める大枠作りを、引き継ぎも兼ねて作成することにしている。

課題 4

①団会議、団委員会の機能と役割を記述してください。

団会議は、団全体と各隊が、部門を越えてスカウトの育成指導に必要な情報を共有し、団全体の活動、各隊の活動、複数の部門連携した活動を実施するために行う。隊の目線ではなく、スカウトの目線で、部門をまたいだ進歩制度、班制度のあり方も探る。

地区、県連、日連の方向性を確認するとともに、自団の方向性を団全体で考える。各隊の活動が適切に行われているか、他部門や団などからの支援が必要でないかどうかを確認する。スカウトの進歩状況を共有し、適切な支援のあり方を考える。

団委員会は、各隊の活動で班制度や進歩制度が有効に機能し、誓いとおきての実践がなされるなど適切に行われているか、事故やトラブルがないかなどを把握しつつ、団全体をマネジメントする。地区、県連、日連の動向を把握し、団の方向性を検討。団行事を遂行する。

登録や旧隊、退団などの事務を行うほか、隊活動費を含む団の会計全体を管理する。組織拡張を行う。育成会と連携して、スカウトの保護者と一体となった団の活動を展開する。

②課題2の隊集会を実施するために、団委員会やその他からどのような支援が必要か、どのように協働するか等について具体的に記述してください。

2014年度の年間プログラムの中から、いくつか具体的な支援を求めるものを上げてみた。

昨年度と同様に、11月の技能大会に向けて、VSによる支援を団会議で要請した。ただ、VSの冒険旅行キャンプと同じ日程になったため、支援はかなわなかった。

CS部門から、毎年要請があるCS歓迎体験キャンプに、GBスカウトをデンコーチで派遣し、ターゲットの取得を目指す。

サイクリングでは、VSやRSに得意なスカウトがいるため、団会議で支援を要請する。

釣りのプログラムについては、団会議で各隊や団委員らで、技術を持っている人の支援を要請する。

50キロハイクでは、以前はカブ隊のプログラムと連携したことがあり、VSやCSとのプログラム連携が可能か、団会議で提案する。給水ポイントでのサービスなどは、BS隊の保護者の支援を期待しているが、団からの支援も必要に応じて要請するとともに、団として50キロを完歩したスカウトへの顕彰を依頼する。

BS部門として計画したスケートについて、団の年プロ会議でBVS隊も実施したいとの意向が示されており、CS部門を含めて、今後、団会議で調整を行う。

団40周年の記念の大営火も行う予定の、春の村の実施場所の予約やプログラムの調整を団会議で行っている。

横浜市栄区のBSの4個団とGSの1個団による主にカブ、ビーバー部門を対象に行う5団ラリーが、15年5月に行われるが、当番団が96団となっているため、BS部門もプログラム支援を行う予定にしている。

課題 5

実際に行われた隊集会 3 回分について、計画書を持参するとともに、プログラムプロセスの各過程それぞれの評価と改善点を記述してください。（行われていないプロセスの過程については行うための改善策を記述してください。）

○7月19-21日の訓練キャンプ（資料5-1）

月間プロを検討するGB集会の予定が、次長の欠席でできなくなり、班長と電話で相談をした。訓練キャンプの出欠状況もわからなかったが、過去のプログラム資料を準備して、上進するスカウトはやらせたいこと、やって楽しかったことを選ぶようなやり方を提案し、班長が班集会で進行をするということにした。結果的に、現GBと二人が次期班長と考えていたスカウトの3人となり、班長引き継ぎのプログラムにもなった。

部活で参加できないスカウトが多い中で、その場にいなくても、過去のプログラムを配付してアンケートとして回答させるなど、参加出来なくても参画させるなどの方法にすることで、全スカウトに参加感をもっと持たせることができたと思う。

○8月1-4日の夏のキャンプ（資料5-2）

12年度は、直前まで参加スカウトが確定せず、結果的に中止になったことの反省から、「参加できる」ということを最優先に実施した。そのため、キャンプ生活をしながら、どこからでも参加可能なようなプログラムを用意した。長期キャンプならではの、というような組み立てはできなかった。部活の大会結果如何で、参加の可否が決まることもあるため、プログラムプロセスよりも、より多くのスカウトが夏のキャンプに参加できたということを重視した。

また、団行事としての日程が変更になったため、私自身は企画立案の中心になっている地震学会事業があり、夏のキャンプに参加できなかった。班長に対して、指示書をメールで届ける（資料5-3）という形で、当日の流れに参画をした。結果としては、何とか入れ替わりながら一定の成果は得たと考える。（資料5-3）

改善策としては、全体のスカウト数を増やし、多少の欠席があっても成立できるような状況に持っていくのが一番。スカウトに、部活かキャンプかを選ばせるような選択はさげたい。私自身、その踏み絵を高校で踏まされ、活動をやめる一因にもなった体験があるためである。

○8月23、24日の送別キャンプ（資料5-4）

上進前のお別れ集会は、これまでボーリングなどのお遊び系もあったが、キャンプをすることもあった。班長とも相談をして、全員が何らかの形で参加できるご近所でのキャンプにすることにして、結果的に5人とも参加できた。

ラストメッセージのプログラムは、GBにはVS上進後のベンチャー章取得が楽になるBP関係のプログラムを入れたい、という相談をただけで、若干、かったるい系にも思われるような内容だったが、結果的にはGB年代と、中1世代との力量差がまざまざとわかるメッセージを作ってくれた。最後に、菊章の授与を団委員長からやっていただけた。

部活後に夜だけ参加してくれたスカウトが、制服を忘れてしまったのが、当該スカウトも残念だった。ここは、丁寧に確認をすべきだった。

○9月13、14日の歓迎キャンプ（資料5-5）

ボーイ活動の楽しさを、というのがコンセプトだったが、GBら中1世代が部活で泊まれなかったため、新入スカウトがちょっと大変そうだった。班長の予定優先で、午前中の訓練は班長だけ

第一教程（課題研究）

だったが、基本訓練に必要なGB訓練をしっかりと行って、午後の基本訓練に臨んだので、班長らしさを新入スカウトに見せることができた。

転団してきた新副長が、まったく初めてのBSキャンプをする3スカウトに、高めのボールを投げている、新人ながら代理班長を命じられたスカウトがテンパっていた。

班長が帰るときに、代理班長、次長を決めて、やるべきことを指示した紙を渡し、それに報告を書くというプロセスを入れることで、多少はカバーはできたが、ちょっとタフだった。集会の最後に、厳しかった副長から差し入れをしてもらうことで、厳しさを緩和する演出をしたが、このあたりは事前の意識合わせが必要だった。

課題 6

プログラム作成において、自身が解決したい問題について列挙してください。

- ・ 1年間のプログラムを行う中での隊長の引き継ぎ。さらに、その次の隊長候補者探し。
- ・ 最上級生がいないなかで、GBがいかにか自信を持って、新入隊員を指導できるプログラムにできるか。
- ・ 中学生の部活とスカウト活動の両立をさせるためのプログラムプロセス（参加できないときにも存在感を作る方法）
- ・ BS年代から、友人を誘えるようなプログラム開発。
- ・ 保護者の理解をより得られるような、プログラムプロセスへの保護者の参画。
- ・ CS年代からのスマートな引き継ぎ、VS年代へのスマートな引き継ぎ。
- ・ 今後予定されているBS、VS課程の見直しを見据えた適切なプログラムプロセス。